

天声人語

「夫はだれだつた」。一風変わった見出しの記事が27年前、本紙の朝刊（東京本社版）に載つた。その年に病死した自称医師の山森将智^{まさち}なる男性が、実は正体不明の人物で、5年間連れ添つた女性が途方に暮れているという内容だつた▼作家辻仁成^{つじひとなり}さん（58）は記事に触発され、「存在証明」という随想を著す。山森氏が偽の身分証のほか、原稿用紙700枚に及ぶ未完の小説を残したことによくし、「自分の存在を100%創作したのか」と推理した▼この随想を高校時代に読んだのが映画監督の中江和仁^{なかえひと}さん（36）。大学に進み、記事をネットで探すが見つからない。ようやく国会図書館で発見する。奇談をいつか映画にしてようと構想を温めた▼自ら脚本を書き直すこと100回以上。10年をかけた企画が応募474作品という映画コンペを制する。中江さん自身が監督して映画「嘘^{うそ}を愛する女」に結実した。なぞの研究医役を高橋一生^{たかはし いっせい}さんが、彼の正体がわからずには苦悩する恋人役を長澤まさみさんが演じた▼「僕の書いた記事がもとになつたのでは」。映画館でそう直感したのは本紙の石橋英昭^{いさかひであき}記者（53）。いまは東北の被災地を取材する編集委員だ。「奇妙すぎるが忘れない一件。あの記事から映画が生まれるとは。記者冥利に尽きます」▼1本の無署名記事が、随想を生み、脚本を生み、映画を生んだ。作品に映る瀬戸内の詩的な風景をたどりながら、四半世紀以上も前の記事がもたらした奇跡のような触発の連鎖をかみしめた。

2018・2・2